

12 月 14 日。最近の若者にはぴんこないかもしれないが、ある年齢以上の日本人にはおなじみの日付である。

元禄 15 年(1702)年 12 月 14 日、大石内蔵助を始めとする 47 人の浪士たちは主君浅野内匠頭の仇を討つために吉良邸に斬り込んだ。いわゆる赤穂浪士の討ち入りである。

この事件は当時から江戸庶民の注目を集め、「忠臣蔵物」とよばれる数多くの作品群が生み出された。

そして、この流れは現代までも続いている。実際、師走の声を聞くと、テレビではドラマや映画が必ず放送されるし、雑誌では特集を組む。赤穂浪士を題材にした小説やエッセイも数多い。仇討をみごとに成功させた「義士」たちの物語は、どうやら日本人の琴線に触れるようである。「忠臣蔵」をつらぬく忠孝倫理の思想は、元禄から遠く隔たった現代においても、まだまだ消え去ってはいないのだ。

そもそもこの忠孝倫理が庶民の間にまで浸透したのは、徳川幕府が儒学を重視した近世初期に端を発している。新しい支配体制を維持し、かつ強化するためには、強固な思想的基盤が必要だ。幕府は、儒学とりわけ朱子学に白羽の矢を立てた。朱子学は南宋の朱熹(1130-1200)によって大成された儒学説であるが、理としての規範や名分を重視するところに特徴がある。つまり、君臣関係(忠義)や家族関係(孝行)を秩序付けるためのイデオロギーとして、朱子学はすこぶる都合がよかったのである。

その朱子学の隆盛は、家康が、藤原惺窩(1561-1619)とその門

人である林羅山(1583-1657)を重用したときから始まっている。林羅山は、幕府に登用され、およそ 50 年の長きにわたって文教をつかさどった人物である。現在、我々が目にする湯島聖堂(東京文京区)は、彼が上野忍丘に建設した学問所が姿を変えたものだ。彼の子孫は、代々、この幕府直轄の学問所の大学頭を世襲した。林家は、江戸幕府おかげの儒官として、わが世の春を謳歌したわけである。

そんな林家の朱子学であったが、幕府正統の学問という縛りが強かったためであろうか、学問研究の分野では停滞してしまう。朱子学は、各派に分裂する。京学派からは木下順庵(1621-1698)・新井白石(1657-1725)らが、南学派からは谷時中(1598-1649)・山崎闇斎(1618-1682)らがあらわれ、福岡では貝原益軒(1630-1714)が活躍した。

その一方で、朱子学に批判的な立場から独自色をうちだす儒学者もあらわれた。儒教は庶民の間にも広がったのである。日本における陽明学の先駆者、中江藤樹(1608-1648)はその代表である。彼は、学問や知識を先行させる朱子学に対して、知識と実践を一致(知行合一)させ、より実践を重視した。

いったいに、陽明学は現実を批判してその矛盾を改めようとする革新性を持っている。たとえば、中江藤樹門下の熊沢蕃山(1619-1691)は、政治を批判して幕府に咎められたし、幕末維新期の大塩平八郎(1793-1837)や佐藤一斎(1772-1859)らは、思想運動を起こしている。彼ら全員が陽明学に拠っていたという事実は、もっと注目されてもよい。

さて、朱子学・陽明学に対して、直接孔孟の古典に帰って教えを学びとろうとしたのが古学である。古学派代表の山鹿素行(1622-1685)は、『聖教要録』で公然と朱子学を批判したため赤穂に流されたが、その後古学は、伊藤仁斎(1627-1705)や荻生徂徠(1666-1728)によって発展した。

こうして儒学に古学が起こり学問の実証的な研究がさかんになると、その影響を受け、日本古来の道を求める国学もさかんになった。国学は、契沖(1640-1701)・荷田春満(1669-1736)・賀茂真淵(1697-1769)・本居宣長(1730-1801)という系譜で展開する。そして幕末には、日本中心の排他的な復古主義となって、攘夷思想と結びつくのである。

このように、江戸時代は、朱子学・陽明学・古学・国学といった仏教以外の思想が、花ひらいた時代である。前述の忠孝倫理といった思想は、徳川幕藩体制のなかで育まれたといってもよいだろう。

江戸時代の諸思想は、明治維新の思想的基盤を形成し、後世に大きな影響を与えたといっても過言ではないのである。

